

# 令和5年度第1回教育課程編成委員会 議事録

【日 時】令和5年6月25日（日）10:00～12:00

【会 場】こころ医療福祉専門学校 3階 講堂

【委 員】出席：大木田治夫，志岐浩二，松永正司，森崎太一，川崎和幸  
藤原善行，小野格，高田一樹，松下周平  
館川大輔，大石勝規，谷口幸太郎，永田俊晴，高橋美如

（敬称略）

1 開会の辞（司会 教育部課長 館川大輔）

本会の開会目的の説明を行う。

2 委員の紹介（司会 教育部課長 館川大輔）

各委員の紹介を行う。

3 委員長挨拶（校長 藤原善行）

- （1）令和4年度の総括・反省
- （2）令和5年度前期の現状と課題
- （3）令和5年度後期の展望

4 理学療法科

（1）昨年度の課題について

ア 臨床実習内で散見される社会性の低下について

その日に学んだ内容について、気づいたことや反省などを記載するデイリーノートを改良して、理解度や学びのポイントのずれが生じないように指導した。指導者がどの程度理解しているかわからない状況や、何を学びたいのかわからない状況とならないように、コミュニケーションの機会となるように取り組みを行った。また、周囲の環境等に配慮して、適切にメモを取る習慣づけについて指導し、読み取る力のみでなく、指導内容を整理し、相手の信頼を得るように心がけることを指導した。

また、コロナ感染対策のみに限らず、欠席時の連絡、相談、学校への報告など、情報共有を徹底するよう指導した。基本的な姿勢としては、実習地の感染対策基準等に準ずるが、疑いのある場合は自身で医療機関を受診し、根拠を持って行動することを指導した。

#### イ 卒業生のフォローについて

同窓会の研修会を再開し、卒業生との繋がりを設け、同年代での悩みの共有や教員も相談に乗りやすい環境を改めて構築したい。卒業生による在校生へのアドバイスや演習補助などの協力を仰ぎ、卒業生のサポートのみでなく、在校生に対する効果も期待したい。

#### ウ 臨床実習の教員参画について

今年度2年生がタブレットを配付してのICTを用いた教育を開始した学生となるため、長期臨床実習中の提出物の共有などについての取り組みを計画する。教員の臨床参加については、引き続き協力病院や頻度など検討していく。

#### エ 今年度の状況について

##### ・学外活動での学びについて

コロナウイルス感染症が5類に引き下げられたことにも関係するが、各スポーツイベントや障がい者スポーツイベントが増えてきている。積極的に学生の見学、参加を促して、興味関心の幅を拡げ、医療従事者としての社会貢献の可能性を共有したい。

##### ・入学前教育変更の利点

ベネッセ進研アド専門学校事業部の教材を採用し、入学前教育を実施した。高校時代を含めた学習習慣や学びの姿勢を把握するアンケートや、課題の提出状況から、事前情報を得て、入学初頭の個人面談の際に活用できた。専門的な知識の獲得などには大きな効果は不明であるが、一定の効果は得ている印象を得た。

#### オ 第58回理学療法士国家試験結果および就職状況

##### ・国家試験

本校（現役）：22名受験、うち20名合格（90.9%）

全国：12,948名受験、うち11,312名合格（87.4%）

##### ・就職

就職希望学生21名中20名内定（1名進路検討）

長崎県内14名、県外6名

今後も県内を中心に就職を斡旋していくが、専門的な向上心を持つ学生に関しては県外への就職も教員と相談しながら進めていく。

#### ○大木田治夫委員

- ア 臨床実習中の対応について、臨床側の指導者も若いスタッフの場合があり、指導力や社会性も配慮して対応することも必要とのアドバイスをいただいた。また、新型コロナウイルス対応については5類への移行があり、対応の変更や検査の有無など臨機応変な対応が求められるところも確認した。
- イ 臨床実習の教員参画について、実習地訪問に合わせて、半日から終日、学生に帯同学びの促しや、指導者との関わりについても指導いただきたい旨を共有した。
- ウ 就職状況の医療／介護の分野別割合など内訳について  
内定者20名内訳  
病 院 17名  
医院・クリニック 2名（県内）  
介護老人保健施設 1名（県内）

#### ○志岐浩二委員

- ア 臨床実習において自主性を持って主体的に学ぶことは求められる。患者の前ではメモを控えるなどの周囲環境への配慮は必要になるが、学ぶ姿勢は期待したいところである。実習指導者の期待に応える学生の行動は重要であり、指導者に参考資料を尋ねるなどの具体的行動の指導の必要性も指摘していただいた。
- イ 学生の就職決定因子について関心がある。目指すべきPT像と、そのためにどのような行動をとるかのビジョンを考案できる学生は強いと思う。先行文献によると、給与・福利厚生、職場の人間関係、新人教育のシステム、専門領域（病期）、居住地の選定などであった。
- ウ Chat GPTなどが話題になっているが、学生の文献離れが散見され、SNSやネット検索、OpenAIの活用についても指導が必要である。内容の正当性、レポートなど情報共有、患者対応などの根拠となる場面での軽薄な検索や考察は慎重に行うところを指導して欲しい。

#### (2) 委員意見

##### ○大木田治夫委員

卒業生のフォロー。若手職員の退職について、さまざまな理由があるかと思うが、学校側に卒業生の本音を聞き出してフィードバックしてもらえると、今後のフォローや改善ができていくのではないかと考えており、一緒に共有できればと考える。

### ○大石学科長

卒業生に国家試験対策を協力してもらおうと共に、関わりを密にしていくことを進めている段階である。実習先であれば訪問の時に卒業生の現状確認や学生時代にこのような学生であったなどの情報共有を行っている。しかし実習先でない場合、卒業後に連絡を取るなどが出来ていない場合もあるため、長崎県内で就職したところに関しては連携を深めるように努めていく予定である。

### ○志岐浩二委員

- ・メモを取るという行動の次のステップとして、周りへの配慮などを行えるように指導していただきたい。チャット GTP 等があり、最近ではタブレットを導入している学生が多く、以前までは文献を読んだりしている姿を見かけたが、今はなくなった。インターネットの情報が嘘とは言わないが、インターネットの情報を鵜呑みにしていないか懸念がある。
- ・長崎県医師会の入会も年々少なくなっている。また、コロナ禍ということもあって、長崎県内の就職先も減ってきているのではないかと痛感している。長崎県にこだわらず、全国に視野を広げた学生募集を行っても良いのではないかと考える。

### ○大石学科長

学生には見られる意識の指導を行っている。どうしても目の前の患者様や指導者が優先になってしまうところがあるかと思う。そうではなく他の患者様や多職種の方にも見られていることを意識して社会性として指導を行っていきたい。また、文献や情報の収集方法、取扱いに関しても、臨床の先生が何を根拠に持って指導を行っていただけているのか意識できるように指導を行っていく。

## 5 介護福祉科

### (1) 報告内容

#### ア 昨年度の議題について

- ・学生の書く力への取り組み 「国語表現」の授業について  
昨年度いただいた意見をもとに今年度の授業内容の見直しを実施し、日本人は文章を読むこと、他者が書いた文章との比較を行い、留学生には介護に関する漢字の学習を取り入れる予定である。
- ・実習時の学生提出書類の改訂介護実習連絡帳について  
昨年度改訂を行い、試験的に導入を行ったところ概ね好評をいただいたため、今年度の実習より正式に採用していく。ただ、改訂の趣旨として各段階の実習のつなが

り、指導の継続性があるため、次回の実習での評価によって、修正等が必要になってくる。

イ 第35回介護福祉士国家試験の結果、および今年度の国家試験に向けて

- ・日本人については、100%合格（18名中18名）を達成でき、留学生についても6名合格と結果がでてきている。ただ、第34回の全体合格率が72.3%だったのに対し、第35回は84.3%と高いものとなっている。学生からも「模擬試験に比べると簡単だった。」という声があがっており、例年と比較すると、難易度が低かったものと思われる。

今年度は、昨年度の結果につながった模擬試験の成績によってグループを分けて国家試験対策や補講を行うことを継続していく。また留学生の合格数を上げるため、介護に関する漢字の学習を補講として取り入れていく。

ウ 科学的介護情報システム（LIFE）について

- ・現状、LIFEについてはカリキュラムに盛り込まれていない。LIFEに関しての介護現場での現状と、教育に関しての期待を伺いたい。

(2) 委員意見

○高比良宏輔委員

ア 昨年度の議題について

- ・実習時の学生提出書類の改訂介護実習連絡帳について

連絡帳の参考資料集のアセスメントの仕方については非常に良いものだと思う。学生にもぜひ実習中にみながらやってもらいたい。改訂の趣旨としてあげている指導の継続性、実習のつながりという部分では、これまでいった実習先のところに実習担当者の名前を記入してもらっても良いのではないか。施設間のつながり、職員同士のスキルアップにもなるし、一人の学生をそれぞれの実習施設が連携して育てていくとなったとき、名前があったら連絡が取りやすい。ただ名前を載せることでの懸念点もある。もし名前の記載が難しいのであれば、実習について施設間の連絡が可能かどうかなどを記載する方法もあるのではないか。また、施設側からの情報があると指導に活かしやすい。

イ 科学的介護情報システム（LIFE）について

- ・LIFEについては、まず現場がというところだと思うので、情報共有をしながら、どう教育に活かしていくか考える必要があるのではないか。法人内の高齢者施設もまだLIFEに完全に取り組んでいるわけではない。学生には情報としてLIFEの概要については知っておいてほしい。またLIFEだけではなく、新しい制

度や業界の動向なども、知識として知っておいてもらいたい。

#### ○有村俊男委員

##### ア 昨年度の議題について

- ・「国語表現」の成果の報告、および今後について  
介護の現場では医療用語を使うことも増えてきている。留学生は特に難しいところだと思うので、ぜひ取り組んでほしい。
- ・実習時の学生提出書類の改訂 介護実習連絡帳について  
連絡帳の実習参加シートは情報の共有ができるので良い。実習施設側からのコメントや評価もだが、学校としての学生の伸ばしてほしいところなど所感があると良い。

##### イ 第35回介護福祉士国家試験の結果、および今年度の国家試験に向けて

- ・留学生は介護の漢字の意味もそうだが、設問の意味も教えてほしい。ひっかけ問題などの見分け方が分かると点数もあがっていくのではないかな。

##### ウ 科学的介護情報システム（LIFE）について

- ・施設に就職したときやはりLIFEについて知っているか知らないかでは違う。概要や制度については教えてほしい。またLIFEを活用にするにあたりタブレットでの入力が必要になってくることもある。やはり年齢が高い職員は使うのが難しく、若い世代に教えてもらっている現状もある。養成校を卒業する学生はICTに慣れている世代が多い。LIFEを活用できる人材が今後求められてくるのではないかな。

#### 6 スポーツ柔整科

##### (1) 昨年度の課題について

##### ア 就職について

- ・夏休み期間中などの合同就職説明会とは別に、個別の企業説明会を年数回開催し、企業側から求められる人材の条件等について、学生が質問しやすい環境を作っていく。また、早期退職や問題がある企業に対しては卒業生に退職理由や問題点の聞き取り調査を行った。その結果を今後の企業説明会に活かしていく。
- ・4月の段階から学生面談を行い、就職活動にあたり柔道整復師として働く上での希望条件（地域・職種・業務内容など）の聞き取りを行った。今年度の就職説明会はほとんど長崎県内の企業を招致しているので、次年度以降も、引き続き聞き取りを

行い、学生に希望にできるだけ沿っていきたい。また、説明会の参加経験がない学生が大半である。

- ・企業説明会だけではなく、特別講義として個別に企業様に来てもらい、学生へ説明会を開催し、個人経営の整骨院の強みなどを推していく。また、説明会后に興味を沸いた企業の有無を確認し、その企業の見学会を開くなど、学生が外部へ動きやすい環境を整えていく。

#### イ 低学力者への対応について

- ・昨年度は入学前の基礎カリサーチと入学後の学力チェックを行ったが、教科が柔道整復科との内容にミスマッチがあったため、入学前の基礎カリサーチのみ継続して行った。入学後は補習などで補っていく予定。また、在校生との交流会を施し、学生同士で勉強や学校生活の情報交換が盛んに行われるように促していく。
- ・面談や学生からの聞き取りを定期的に行い、授業の難易度や進行具合について定期的に確認していく。他学年との交流や卒業生からの講話などで1年生のうちから身に付けておくべき習慣についての周知も行っていく予定。また、国家試験過去問題集を1年次に購入し、早い段階から問題慣れや重要ポイントの理解を促していく。
- ・入学前教育だけでなく、模擬授業体験会などを年度末に行い、授業の雰囲気や学習内容のある程度入学前に把握できるようにしていきたい。入学前に難しい印象を持たれる内容の授業ではなく、柔道整復師の魅力を魅せられる内容の体験会を実施していく。

#### ○松永正司委員

##### ア 今年度の状況について

- ・国家試験合格率の減少について

国家試験合格率は学校評価を左右しかねない重要な数値だと思う。前年度は長崎校84.6%、佐世保校100%と高水準を維持しているが、国家試験対策は学校をあげて早急に対応しなければならない重要課題である。全力で対応していると理解しているが、①教員・OB・在校生を含めた国家試験対策用プロジェクトチームの立ち上げ、②過去問の解き方の指導、③スマートフォンを活用した勉強実践、④毎回講義終了後に国試過去問題を実施（復習させる）してみてもどうか。

イ 学生の満足度について

- ・退学率が高いことは、学校経営に関わる由々しき問題である。他学科とも協力し、手段を講じた方が良い。退学理由として、学生生活の問題（人間関係など）、学習意欲低下、他分野への興味、経済的理由などが推察できる。学校側も学生との交流を実践・対策していると思われるが、提案として、①常設の相談窓口の設置、②ネットの相談窓口、③授業評価やアンケートの実施、④授業以外の学習の場を提供などを実践し、学生の異変にいち早く気付ける環境作りを行ってみてはどうか。

○古川 雄太委員

ア 国家試験合格率の減少について

- ・学校側が柔道整復師の過去問題集は活用していると思うが、理学療法士や鍼灸師、看護師など、他の学科の問題集の活用を検討してみてはどうか。共通科目である解剖学、生理学は活用すればより理解が深くなるはずであるし、問題に対する経験値も増えることで様々なパターンにも対応できるようになるはずだ。1年生のうちから柔道整復師の過去問題集を活用しながら授業展開を行い、2年次から他学科の過去問題集を活用できれば、3年次には問題に対する理解度も相当高くなっていると予想される。

イ 学生の満足度について

- ・学校内の企業見学会ではなく、学校側が学外に連れて行くのはどうか。普段の授業が大事なのは学生も理解していると思うが、座学が続けばマンネリ化が避けられず、意欲の低下に繋がってしまうと思われる。学校内に企業様を招致しているようだが、学生からすると座学の延長線上であり、あまり新鮮味は感じられないと思われる。学外活動をすることで、モチベーション低下を回避することや、見学会を行うことで就職活動に繋がる可能性もあるのではないか。

○石原義大委員

ア 国家試験合格率の減少について

- ・例年、全国的に学生の質が下がっているように思われる。他校の入学状況は新卒が少なく社会人が多いと聞く。社会人は開業意識が高いため、普段からの学習習慣を大事にするはずだ。社会人入学が多ければ、新卒学生に影響を及ぼし、クラス全体の勉強習慣に繋がるのではないか。社会人の学費を下げるなど、社会人が入学するメリットを打ち出せば、結果的に国家試験合格率の向上が見込めるのではないか。また、こころ医療福祉専門学校の国家試験の受験者数が他校より低い数字となっている。受験者数が多い方が1人あたりの合格率への影響が少ない



ことは当たり前だが、受験者数が少ない学校は高校生やその保護者、社会人が入学を検討する際に懸念材料になりえる。受験者数を増やすための対策（授業・補習など）も必要だと思われる。

#### イ 学生の満足度について

- ・国家試験の勉強に来ているのは学生も理解しているが、学生生活を楽しまたいという気持ちも持っているはずだ。学校側が勉強だけを意識させてしまうと学生のモチベーションも低下してしまう。実技大会などの他学年交流会などを行ってみてはどうか。審査員も学生に任せれば、審査するために本人が実技について理解する必要があるので、必然的に実技に励むのではないかと思われる。また、卒業教育を行っているのではあれば、卒業生のみでなく、在校生も参加させるのはどうか。卒業生が研修会に参加できることを在校生のうちから知っておけば、「卒業後も学校は学生を気にかけている」と気付くことができ、満足に繋がるのではないかと思われる。

### (2) 委員意見

#### ○松永正司委員

##### ・国家試験について

私が学生時代はネット時代ではなく紙の時代だった。国家試験について、教員や在校生の国家試験委員、OBなどが試験の傾向などを教えるなど、さまざまな方々が参加して国家試験まで一丸となって取り組んでいた。学生同士で勉強しない、成績の悪い学生の後押しを行ったりしていた。OBも含めた国家試験対策のプロジェクトチームを発足して、国家試験に対する取り組みを行っていただければと考える。

##### ・スマートフォン、タブレットについて

スマートフォンやタブレットであれば、どこでも冊子の問題集を広げずに勉強することができる。今の時代に合う学習方法があるのであれば、費用面の懸念はあるが活用しながら国家試験に取り組むことも良いのではないかと考える。

##### ・学生満足度について（常設相談窓口の設置）

教員は授業や学生対応の他に事務的な業務が膨大にあり、事務的な業務を行うことで学生との接点が希薄になる事を懸念している。学生対応に専念できる専任の教員がいても良いのではないかと感じる。

##### ・学生生活について

こころ医療福祉専門学校には、柔整科だけでなく、医療系国家資格取得を目指す学生が多くいるので、他学科の学生との交流が持てる機会を設けて学校生活を楽しくしてもらいたい。

・柔道整復師について

柔道整復師は柔道と名に入っているが、黒帯を取得している学生がいない。やはり「柔道」とついているため昇段試験を受けて「黒帯」の取得を目指してほしい。

○永田学科長

- ・プロジェクトチームについては、教員だけでなく、学生を巻き込むことによって責任感も生まれ、勉強への意識改革に繋がる良いきっかけになると考える。
- ・スマートフォン・タブレットでの学習に関しては隙間時間に勉強ができるメリットは感じている。教員側から情報提供はするが、導入については学生の金銭面に課題があるため検討していきたい。
- ・相談窓口に関しては、前向きに検討していきたい。
- ・他学科との交流に関しては、本学科のみならず他学科の学生満足度にも繋がると考えるので、他学科と協議していきたい。

7 スポーツ鍼灸科

○川崎和幸委員

(1) 臨床実習について

(川崎) 昨年度の臨床実習は5日間から2日間に変更して行われた。学生の感想はどうだったか。

(高橋) 全員、とても勉強になったという感想だった。まだ2年の後期なので、知らないことも多く、わからないこともあったと思うが、見ること・聞くこと全部勉強になった、先生方にはいろいろ見せていただいたり、体験させてもらったという感想ばかりだった。

(川崎) 2日間の実習はやはり少し短いように感じた。忙しくて、実習時間中に十分説明する時間がとれなかったり、訪問鍼灸に行く曜日を決めているので見学に連れていけない学生が出てきたりした。

(高橋) 受け入れる先生方にとって2日間は慌ただしいので申し訳なく思う。ただ戻って来た学生は皆、とても充実した時間で、経験できてよかったと言っていた。昨年度の日程は、先に学内で2日間、その後外部で2日間、その後また学内で1日間行った。事前に学内で施術計画立案・実施の体験をしたうえで外部に行き、戻ってきて振り返りを行った。その結果、まだまだ勉強しないといけないことを実感して戻り、モチベーションにつなげられたように思う。日数については今後も検討していきたい。

(川崎) 事前に学生に見たいことアンケートをとって、それを事前に読んで把握できたのはよかった。

(高橋) 外部臨床実習で見学できることを想像できない学生がいたので、事前にレクチャーをした。今いる教員は外部臨床実習をできなかったのも、もし今学生

ならどんなことを見学したいかを教員に実際にアンケートをとり、学生へ紹介した。学生は参考にはしていたが、自分なりに考えていた。事前に考えた質問を実習中に唐突に質問する学生もいたようだが、先生方にはご協力いただきありがたかった。

#### ○森崎太一委員

##### (2) 知識・技術の習得について

- (森崎) 今年1月末に3年生に鍼灸師会の説明会を行った。後半で実技を行った際、経絡あん摩という手技を見てもらったが、3年生が経絡をわかってない感じがした。経絡は覚えてないのか。
- (高橋) 卒業時に経絡を臨床応用できるほど理解している学生は少ない。しかし経絡は必ず覚えなさいといけなないので、1年時から使いながら覚えるようになっていくが、試験が近づかないと本腰を入れて覚えなさい。そのため、試験問題は解けるが、施術ではすぐにイメージできないという学生が多い。森崎先生は学生時にどのように覚えられたか教えてほしい。
- (森崎) 私の母校は、治療院経営をしている鍼灸師が教員をしていたので、授業で実際の治療を見せてもらいながら覚えていった。
- (高橋) 本学科も以前は実際の治療の話を多く盛り込みながら授業をしていた。面白かったが、基礎知識がない状態での治療の話は理論がわからず、結局3年生になっても治療計画が立てられなかった。そのため、現在は1年時は基礎、2年時は治療理論や技術、3年時に施術練習という段階を踏んでいる。そのため、実際に体に触れながら習得していく時間は少なくなっている。
- (森崎) 実技で実際に触って、ツボを探してその反応をみるということを重視する授業だったので、とにかく触る、手先の感覚を重要視して、その中で経絡も学んだ。
- (高橋) 現在、国家試験問題に対応できるようになるために、教科書通りに覚えて、正確にできるようになることに重点を置きすぎているかもしれない。また、最近は観察したり、真似することが苦手な学生が多いので、よけいに教科書に頼りがちである。そのため視野が狭く学ぶ上でも効率が悪い。実際にやりながら試行錯誤しながら、概念的なことをイメージできるように授業や実技のつながりを作り、基本的なことの習得

#### ○川崎和幸委員

##### ・臨床実習について

昨年から2日間の臨床実習と2日間の実習の振り返りに変更になったが、今まで5日間行っていたことを2日間に詰め込んでいるため、戸惑いはあったが学生の感想

としては勉強になったとの意見を頂けて良かった。臨床実習に来て、国家試験に向けたモチベーションアップになったり、鍼灸師の仕事をより深く理解してもらえたかと思う。アンケートを事前にとる事によって、学生が臨床施設に求めていることが把握でき、受け入れる側として事前に確認できた事は良かった。

○森崎太一委員

- ・昨年度1月に鍼灸師会の説明会を行なわせていただき、今年度は入会する人が多くなった。今年度もできれば行わせていただきたい。現在、鍼灸師会は若手の入会者が少なくなってきているが、今後若手の鍼灸師の力が必要になる。鍼灸師会の中にこころ医療のグループを作成し、OB会のような取り組みをしていくことによって、もっと入会しやすくなるのではないかと考えている。この取り組みを鍼灸師会としてバックアップをしていきたい。

7 質疑応答

○藤原校長

- ・各業界から今後に向けて本校での教育指導、人材育成をしていく上で、どのような人材育成が求められるのか意見を頂戴したい。

○大木田治夫委員

- ・待ちの姿勢が多いように感じる。理学療法士協会の会員数も減ってきており、デメリットを感じて退会する人が多い。協会や病院のシステムや道具、器具を自分がいかに使うかが大切であり、受け身ではなにも得られない。自ら学ぶ姿勢や自ら得に行く姿勢などを学生の時から心構えなども指導してほしい。

○志岐浩二委員

- ・LIFEには理学療法士として関わっていくことになる。2024年には同時改訂も控えている。LIFEは一つミスでエラーが出てその業務全体が滞ってしまうようなシステムになっている。今の新しいものを学生の時から積極的に学ばせて、マニュアルに載っていないことにも対応できるような学生の育成をすることで現場が円滑に回るのではないかと考えている。

○松永正司委員

- ・教員自ら率先して勉強していただき、学生が憧れる・学生が誇れる教員になっていただきたい。

○森崎太一委員

- ・実技の授業を行わせていただいたが、学生に温度差を感じた。質問等を行ってくる学生もおり、このような前のめりの姿勢が大事ではないかを感じる。学生を勉強会に参加させたり、先生の手技を見せたりすることが良い刺激になるのではないかと思う。高校総体のケア等にも参加してもらうなどの機会を増やしてもらうと良いのではないかと考える。

○川崎和幸委員

- ・臨床実習を受け入れて痛感することは、教えてもらえるものだと思っている学生が多い。自分から進んで情報を取りに来て、積極的に学んでいく姿勢の育成が必要だと感じる。社会に出ると自分から上司などに教えを願うことが必要となるため、在学中からその姿勢の指導をお願いしたい。